

ミジンコのぼやき

1999年2月末 その1

ええと、まずは御挨拶と参ります。ほとんどの方が初めましてとなります。畑本佳香（はたもとよしか）と言います。私が宇宙船地球号の会に出会ったのは、2年半前の秋でして、広島市青少年センターの高校生講座です。その時から、相棒の川岡論之（かわおかさとし）とつるんで宇宙船や、ひと・まち・ネットワークの方に、結構参加してます。お互いに、学校や受験、他の活動の方が忙しくなりなかなか参加できなかったのですが、私の方が一段落ついたのでこのたび復活という事になりました。これからよろしくお願ひします。

ええと…タイトルの理由なんですけど、私自身一人言が多く、ボソボソ何か言うのが癖なんです。それに私は、これから大学に進学し、いろいろな基礎知識や応用力を身につけていくとても小さな存在です。それを何故か「ミジンコみたい」とひらめいてしまったので、まあこういうタイトルになりました。毎回、私と論之が日常会話として語り合っている、環境に関係することを、私が文章にしていきたいと思っております。

では、今回のお題と参ります。

街づくりと自然環境の関連性について

昨年秋に、二人して参加した、ひと・まち・ネットワークの講座「五日市の町づくりプランニング」で、町づくりの勉強をしていた時のことです。広島市佐伯区の五日市町はベッタウン化が進み、大型スーパーが何件もあるような大きな街になってきました。しかし、今の姿からは想像もつかないような自然環境が戦前までは存在していました。国道2号線より南の海には海水浴場がありました。駅前も区画整理されておらず、小高い山もありました。五日市公民館区域ですが、コイン通りや八幡川沿いを散策して、私は驚きました。昔の面影の残る住宅地には、庭木が多く住宅街にも緑は点在していました。が、しかし、近年建設されたマンションの多くは、田畑の中に建っている大半でした。その上マンション付近の道路は、車一台がやっと通れるくらいの道幅しかなくきちんと舗装もされておらず、鉄板が置かれているだけのところもありました。道路の横にはふたのされてない川幅約1メートルのドブ川があり、空き缶やビニールゴミなどが捨てられており、白く濁った水が溜まっていました。近所の住民はそれを見て何も思わないのでしょうか。自分で掃除しようとは思わないのでしょうか。それが本当に快適ライフをうたっているマンションの在るべき姿なのでしょう。五日市という街は、文化だけではなく、住民の街への愛着、すなわち自意識自体が薄れつつあります。環境保護も、国という巨大組織する物ではありません。個人同士が集まり、町単位で行えるようになればすべての物への愛着が沸くはず。それが自然環境であったり人間関係であったり。

私はこれから、慈善活動や偽善活動的でない、環境活動を行うため勉強していきたいと思います。

~~~~~ビオトープ付き分譲住宅完成!?~~~~~

1999年2月25日(木)の中国新聞朝刊を読まれた方ならもうわかるはず。今全国各地の小学校で授業教材としてつくられている、あのビオトープが、一般住宅にも進出してきたわけです。

ビオトープとは、ドイツ語で「野生生物の生息空間」を意味するわけですが、そう簡単に作れる物ではありません。雨水の循環する池を掘らなければならないし、水草を植えたり、メダカを放流したり。池の周りにも自然と同じような条件をつくってやらないとなりません。それが、人工的な物であっても、それが人工的な自然とは一味違う工夫が必要となってきます。ですから、最低限の生態系の知識が無ければ作ることは不可能なものです。ビオトープをつくるには、環境や条件が揃わなければ非常に困難なものです。

省エネ住宅の電化住宅が今、話題です。確かに生活は便利です。高層マンションの上層部は虫が寄りつかず、快適です。それは人間がつくり出した人工的な住居空間です。そのような空間での生活に疑問を抱いている人は何パーセントいるのでしょうか。本来の人間の生活とは自然との共存の中で営んでいくものであります。しかし、失っていく森はそう簡単には原形通りには戻せません。今回、記事になった「関さんの森をはぐくむ会」の方の発想には驚きました。教材のイメージの強いビオトープを、昔の面影を取り戻すためにつくろうと、私なら思いもつかないし、行動もなかなか取れずにいるでしょう。しかし、このビオトープづくりに、近隣の学校の教師や、地元住民が集まり、森の保護や保全にだけでなく地域全体の自然復元にも取り組む向く姿は、とても理想的な図である。このニュースを機に、私自身も思考を柔軟にし、このような活動を今後発足したいものである。

文章をかくのは、本当に難しいものだ実感しております。けれど、毎日新聞を読んでいると必ず興味のある自然環境の記事が掲載されており、今までその記事に関しての私自身意見を言う場が無かったので、このスペースを今後活用し、皆さんに私たち自身の姿勢などを見て頂きたいと思います。

相棒共々、春から本腰を入れていきますのでどうぞよろしくお願いします。

1999年2月26日

水田本 仁 啓